



「ジャーナリスト教育とジャーナリズム研究」

スピーディーに移りゆく社会と氾濫する情報。賢く、正しく情報を発信・選択するために必要なことは——。ジャーナリスト教育に携わる朝日新聞ジャーナリスト学校の村松泰雄校長と上智大学新聞学科の鈴木雄雅教授がジャーナリズムの今とこれからについて語った。



上智大学新聞学科教授
鈴木雄雅氏

すずき・ゆうが / 1953年東京生まれ。上智大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。日本新聞協会研究所勤務を経て、上智大学文学部新聞学科専任講師に。助教授、教授を経て2005年に同大学院文学研究科委員長。「大学生の常識」(新潮社)、「グローバル社会とメディア」(共著、ミネルヴァ書房)など著書多数。

日本のジャーナリズムの現状と課題を考える

村松 21世紀になってから、10年ちょっと経ちました。世界の動き、変化を肌で感じている人も多いと思いますが、ジャーナリズムの器であるメディアにも今、大きな変化が起きているのではないのでしょうか。

鈴木 若い人のなかには、「新聞はインターネットの補完ですか」と聞いてくるような、我々と全く異なる発想を持つている人もいます。ニュースは携帯電話やパソコンから受け取ることが多いという学生も増えてきていると思います。

村松 新聞やテレビといった、20世紀に全盛を迎えたメディアが築いてきたジャーナリズムの中心を、新しい時代に対応できるように定着させていくかは、これらの課題かもしれません。さらに、現場では常に、情報発信の方法が、「我々が今まで体で覚えてきたもので本当にいいのか」とも問われていることを実感します。

鈴木 ジャーナリズムの衰退というようなことをよく耳にしますが、私はむしろ、ジャーナリズム力の変容だと捉えています。長い歴史のある新聞、そして映像



朝日新聞ジャーナリスト学校校長
村松泰雄氏

むらまつ・やすお / 1948年神奈川生まれ。72年朝日新聞入社。政治部員として国内政治や外交政策の取材に携わった後、米国ワシントンに駐在。政治部次長、論説委員、ヨーロッパ総局長、論説副主幹などを経て2008年主幹。10年に退任後、常勤顧問兼ジャーナリスト学校長。

とテレビ、現代のウェブメディア……。新しく出てきたメディアは、既存のメディアが持つ機能をどんどん採り込んでいくわけです。

村松 ウェブに代表される今のメディアは、双方向性ですね。万人が万人に情報を発信できるし、手軽に受信もできます。その双方向性を既存のマスメディアがどのように生かしているのか、多くのメディアが模索しています。

鈴木 ウェブがジャーナリズムの機能をもち、誰でも情報発信が可能な現代は、ある種のパーソナルジャーナリズムの時代といえるのではないのでしょうか。

村松 そういふ言い方もできるかもしれませんが、ジャーナリズムを職業としている人間に

も随分変わりました。新聞も時代とともに

社会に目を向け、情報の価値を見極める力を

とつては、発信する情報が社会にとつて価値あるものかどうか重要です。新聞でいえば、記者が取材し、情報の価値を考え、読者に提供していくわけです。ウェブメディアでは、誰もが自分の持つて

いる情報を自由に発信できますが、その情報がどれだけ公益性があるものかどうか判断する作業が社会の存立に欠かせません。メディアの形が変わっても、やはり我々には、社会にとつて有用な情報を発信していかなければならないという使命があります。そういう意味では、ジャーナリズムそのものの価値は変容していないと思います。

鈴木 情報の価値を見極める力は、ジャーナリズムにとつてなくてはならない機能だといえますね。メディアが多様化するほど、情報の送り手の意識と受け手の意識は、変わってきていると感じます。一番はアナログとデジタルの違いではないでしょうか。デジタルは編集加工がしやすく、アナログではそれがしにくいといった技術的な部分も含め、実際の現場ではいかがですか。

村松 デジタル時代になって新聞づくり

も随分変わりました。新聞も時代とともに

も随分変わりました。新聞も時代とともに

も随分変わりました。新聞も時代とともに

も、また、技術の進歩や変化によつても変わっていくかなければなりません。ジャーナリズムの本質は変わらないと考えています。

ウェブメディアの進化とジャーナリズムのあり方

鈴木 ソーシャルメディアの活用などについてはいかがですか。

村松 欧米のメディアは、積極的にソーシャルメディアを使って発信していくことを推奨しています。例えば米国のあるコラムニストが、「私はこれからクリントン元大統領を取材しますが、皆さん何かいい質問はありますか」と発信。それに対して多数のコメントが返ってきます。もちろん、利用にあたってしっかりした指針があります。

鈴木 まさに双方向性ですね。

村松 記者の働き方もどんどん変化してきます。最近では、私はニューヨーク・タイムズ紙の記者だから、朝日新聞の記者だからという組織体にもとつて仕事をするというより、個々の記者として社会の現実、ニーズと向き合つて仕事をすることが大事になってい

ます。そのようななかでも、記者は、ジャーナリストとしての価値基準や判断基準、報道倫理をしっかり持つていなければなりません。

鈴木 公共の利益としての情報をどう考えるか、どう報じるかも含め、個々のジャーナリストに問われる課題ですね。

村松 記者が自分の足で取材をすることも必要になってくるでしょう。よく批判されることですが、記者クラブというものがあり、政治報道でいえば、政党や役所ごとに日常的に記者がそのなかでいて、取材・報道をしています。記者クラブの有用性は、もちろんあるのですが、内側には見えないことが多いのです。

鈴木 確かにそうですね。社会の出来事にはいろいろなことが絡み合つてい

ます。内側にいるよりは、外側に目を向けて、うごめいている事象や人を自分で見つけ、情報を得て考え、いかに報じていくかが大切なかもしれません。その過程でジャーナリストとしての倫理観や判断力も培われていくのでは

うね。

村松 発表報道に頼りすぎず、独自の報道、調査報道に力を入れていくべきだと痛感しています。福島第一原発の事故に関する報道で、発生直後、新聞やテレビは「また、大本営発表をやっているのか」という批判を浴びました。政府や東京電力が発表したデータや見解をもとに報じたわけですが、それを独自に十分検証する余裕もなく、発表をそのまま報道してしまうことによつて、結果的に、政府の広報のような役割を果たしてしまつたのです。

鈴木 今回のことに関していえば、事故が起きる前に、原子力発電は事故が起こりうるものだとか、調べ、知識を持つておけば違った報道ができたかもしれないということですね。

「想定外」といふ言い逃れをしないメディアに

村松 備えておく力が必要になってきます。何事でもそうですが、これからのメディアには「想定外」といふ言い逃れは許されな

いと思います。これまでの価値観が、これほど揺れている時代はないと思います。しかし長いスパンで見ると「現在は激動の時代」といふフレーズはどの時代でも使われていて、社会とその価値観は変わり続けているものだということがわかります。

村松 同意です。昨日までの常識が明日には通じないかもしれない。複眼的な判断が求められる時代に、記者には今までも増して自分自身でデータを収集し、考え、価値付けをしていく力が求められていると思っています。



変化の早い社会状況のなかで 情報の価値を見極めるために

鈴木 新たな情報のツールとしての携帯電話やパソコン。朝日新聞でも「朝日新聞デジタル」を運営していますね。

村松 人口が減少していく時代です。紙の媒体がこの先部数を伸ばすことは考えにくいですね。「朝日新聞デジタル」はタブレット端末やスマートフォンでニュースを持ち歩けます。ニュースそのものの需要はなくなりません。そこで新しいメディアで読者を集め、ジャーナリズムの責任を果たしていくとしています。

鈴木 紙の新聞との違いはどんなところでしょうか。

村松 ひとつは容量が無制限ということ。ですから「朝日新聞デジタル」専用のコンテンツもどんどん増やしています。また、パソコン版では「地方で起きた小さな出来事」を、日本中で読むことができます。のも特徴です。紙の媒体では、神奈川県で起きた小さな出来事の記事は、北海道では読むことができません。それが可能になったことで、情報の流通力、伝播力は強まると考えています。

鈴木 より詳細な情報や細かいニュースを収集することができるようになりますね。

村松 デジタルというアウトプットの方に意識がいきがちですが、インプットの面でも、ウェブの世界を積極的に使っていくという試みもあります。朝日新聞では、社が公認した記者が「writer」を始めていますが、これは反響が大きいです。また、「Facebook」などは、非常に専門知のあふれている世界。例えばお医者さん同士がそのなかで最先端の医療技術について情報交換をしていたりもします。そういうところから記者が情報を得て、取材のヒントにすることもできるわけです。

鈴木 新しいメディアに関しては、プラス評価もあれば、マイナス評価もあります。新しいことに挑戦する時にはある種の危うさも伴っている気もします。

村松 その危うさを乗り越える方法も考えていかなければいけません。ウェブの情報を利用して厳格に管理をしています。情報が事実であるか否か、最後は人と差しかけて確認すること。それが不可能であれば、あらゆる手段を使って確認し、確認を得る。これはウェブであるがなるが同じこと。私たちはそれを若い記者たちに口を酸っぱくして伝えています。

鈴木 メディアの変容によって、既存メディアの新たな価値が見えてくる場合もあります。例えば、1991年の湾岸戦争のときに、新聞はそれまで評価されてきた速報性という機能の面でテレビには追いつきませんでした。テレビカメラが戦場に行くと中継していたわけですから、ただ「writerやFacebookをうまく使っていくことで、新聞はまた速報性を取り戻していく可能性もあるのだと改めて感じています。

村松 映像の中継だけではなかなか伝えにくい、情報の背景などを多面的に伝えられるのも新聞の強みです。新聞の機能が求められなくなることはあり得ません。ウェブメディアという巨大な海の中で泳ぎながら、新聞が持つ役割をどう生かしていくかを考えていかなければならないと思っています。

鈴木 今後のジャーナリスト教育の現場が大学に求めるもの

鈴木 未来のジャーナリストを社会に送り出していく上智大学と、実際にジャーナリストとして働く人を抱えている朝日新聞。新聞記者としては、より個人が大切にできるといふ話もあり



ましたが、これから必要となってくる人材、能力などについて教えてください。

村松 私が朝日新聞に入社した当時は最低限のことは上司が教えてくれましたが、あとは、太平洋の真ん中でボートから落とされて、自分で泳ぎを覚えろ、という感じでした。しかし、メディアやジャーナリストを取り巻く環境は当時とは大きく違って、現在は、記者活動を始める前に社会状況やメディアの法制、報道と記者の倫理を基礎教育にプラスし、強化しています。大学でもそういった部分に力を入れていただければうれしいです。

鈴木 上智大学の場合は、新聞学科があり、新聞だけでなく広くメディアについて学ぶことができます。メディアの変容や送り手論、受け手論など様々な角度からの教育を心がけており、毎年4割くらいの学生がマコミ関連に就職しています。ただ、ジャーナリスト教育としては、まだまだ十分でないということも認識しています。メディアの法制や判例は、もちろん授業内でも扱っているのですが、最近では学生全体になぜかという力が欠けてきているように感じています。

村松 なぜという問いかけはジャーナリストの基本ですが、それを急に大学でというのは難しいですね。そこは、教育全体の問題かもしれません。

鈴木 そうですね。ただ、考える、思考する訓練を大学の授業で少しでもできればと思っています。例えば私は授業でよく実際の新聞記事を教材にして、君ならどうするかと聞いています。生の材料とケーススタディーを用いてディスカッションすることで、考える力を育んでいきたいのです。

村松 私はよく若い記者に座標系の話をします。「Y軸が時間軸でX軸が地球軸。その交点に君がいるんだよ」と。昨日がなければ今日は無い、その時間

軸のなかで社会は動いているというものの見方を持たなければ記者の仕事はできません。今起きていることが、過去とどう関わっているか、検証できなければ記事は書けないのです。もう一つ、地球軸ですが、グローバル化によって地球はとて小さくなっています。日本の一地方の中小企業の経営が、中国やヨーロッパの経済に左右されてしまう時代なのです。だから頭の中にはいつも地球儀を置いておく必要があると思っています。そしてニュースを英語で読める力もつけておくといひでしょう。あとは、「人」に対する関心は持つていてほしいですね。

いますが、みんな志は高いです。しかし、人と接するのが少し苦手なのかなと感じることがあります。記者の仕事はとやうやって相手とよく付き合うことが大切。自分とは合わないと思うタイプの人も、相手の心を開かせて話を聞かなければいけません。そういう面で苦労している若い記者はいます。

鈴木 理念、理想も大切ですが、多様性をいかに受け入れるかという許容範囲がこれからの時代は広く求められるのでしうね。

村松 今の社会に、多様な意見を知るのが面倒だからといってつの方向からしか物事を見ない人が増えているように思われることは、ちょっと心配です。

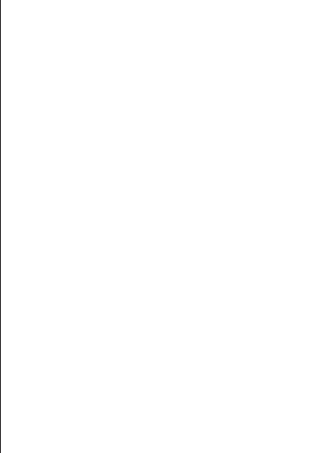
鈴木 メディアも大学も、もつと外側に開かれて、いろいろな批判にさらされたり、多様なものを受け入れていく姿勢が必要ですね。

村松 その通りです。物事を見る視点の多様性をわきまえておくべきです。とくに記者を目指す人には、複眼的な視点を育てておいてほしいと思います。日本と中国の関係や、日本とアメリカの関係を考えてみると、日本のことだけに注目した内向きの報道であつてはいけないと思います。国際関係は当事国以外にも影響を与えます。それがひびがえつて日本に影響します。日本が世界からどう見られているかを知っておくことが大事でしょうね。それには常に外国の報道を読んだり見たりするのが手取り早いですよ。

鈴木 ジャーナリストの仕事はまず人に会うことですね。そして、倫理観、正義感があり、人に信頼されること。さらにニュースセンスや素朴な疑問を持つこと、知的好奇心があること、体力、知力、気力があがり、食わず嫌にならないことが必要ですね。

村松 記者になつて1年から3年くらいまでの若い記者たちの成長過程を見て

います。上智大学は国際感覚を身につけやすい環境です。留学生も多く受け入れていますし、留学制度を利用して、多様性を学べる場をいながらにして、多様性を学べる場をいながら、充実させていきたいと思えます。大学でのジャーナリズム教育とメディアの現場のジャーナリストをうまく融合させていきたいですね。



最上の
叡智



SOPHIA 100th ANNIVERSARY
2013
上智大学創立100周年記念事業

ソフィア(Sophia)——それは「最上の叡智」を意味するギリシャ語です。

ローマ教皇の命を携えて来日した3人のイエズス会神父が、1913年東京に開学した大学にSophia University、すなわち上智大学と名付けました。

創立当初からの建学の精神である「キリスト教ヒューマンイズム」の伝統を受け継いで、2013年、上智大学は創立100周年を迎えます。

8学部28学科—多彩で充実した専門教育を提供

<ul style="list-style-type: none"> ■神学部 ・神学科 ■文学部 ・哲学科・史学科・国文学科 ・英文学科・ドイツ文学科 ・フランス文学科・新聞学科 ■総合人間科学部 ・教育学科・心理学科・社会学科 ・社会福祉学科・看護学科 ■法学部 ・法律学科・国際関係法学科 ・地球環境法学科 	<ul style="list-style-type: none"> ■経済学部 ・経済学科・経営学科 ■外国語学部 ・英語学科・ドイツ語学科 ・フランス語学科・イスパニア語学科 ・ロシア語学科・ポルトガル語学科 ■国際教養学部 ・国際教養学科 ■理工学部 ・物質生命理工学科 ・機能創造理工学科 ・情報理工学科
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※2012年度より入学定員を増員しました。

